関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

関西大学独逸文学会研究発表概要（第102回研究会発表会）

その他のタイトル	Resumees der Referate bei der Tagung 2009
著者	崎山 円，菅野 瑞治也，平井 昌也，須摩 肇，村上 嘉希，北川 尚，永井 達夫
雑誌名	独逸文学
巻	54
ページ	211-214
発行年	2010-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018038

関西大学『独逸文学』第54号 2010年3月

関西大学独逸文学会研究発表概要
(第102回研究発表会)

1．ステレオタイプの形成過程とその維持について
――ドイツの訪日用ガイドブックの中の日本描写を例に――

﨑山　円

〔本誌掲載論文参照〕

2．ドイツの学生結社ブルシェンシャフトの成立過程について

菅野瑞治也

ドイツの学生結社「ブルシェンシャフト」の運動は、周知の如く、1817年10月のヴァルトブルクの祝祭においてその最大の高揚を示し、ブルシェンシャフトはまさにドイツの歴史舞台にその名を刻むことになる。しかしながら、この学生結社が1815年6月に創設される遥か以前に、同郷学生会ランツマンシャフト学生結社形態が古くから既に存在し、独自の活動を展開していたが、その後18世紀中頃に新しいタイプの学生結社オルデンが出現した。会員確保の基盤を持たないオルデンは、新入会員獲得の基盤を恒常的に有するランツマンシャフトの内部に巣食い、彼らの組織基盤を利用しつつ、巧みに活動領域を拡大していく。そして、ブルシェンシャフトが登場する以前に存在していたこの二つの学生結社の活動を詳細に調べてみると、両者の間には、共存関係というより、厳密な意味では一種の「共生的結合」関係が存在していたことがわかる。オルデンは古いタイプのランツマンシャフトと「共生」しつつ、ランツマンシャフト的な「地域主義の原理」を放棄し、構造的にも硬直化した時代遅れの「古い」ランツマンシャフトが新たなる変容を遂げる際の言わば「触媒」として作用した。また、オルデンはフリーメーソンの付随現象では決してなく、オルデンとフリーメーソンは、あくまでも本質的に極めて異質な二つの世界として捉えられなければならない。ナポレオン

解放戦争の結果齎された近代市民的なドイツに固有の〈Nation〉という概念の成立にあっては、反啓蒙主義的・純血主義的民族主義に基づく政治的ロマン主義がそのイデオロギー上の基盤となっていたわけであり、したがってブルシェンシャフト成立のための精神的土壌は、時代思潮という観点においても予め用意されていたといってよい。そして、創設期ブルシェンシャフトの思想の中にも認められる、フェルキッシュ（völkisch）な国粋主義、民族純血主義並びに反ユダヤ主義に基づく政治的ロマン主義をナチズムのそれと同一視する見解も一方では存在する。確かに創設期ブルシェンシャフトは、このようなネガティブな側面ももっていたともいえようが、いずれにせよ、創設期ブルシェンシャフトの活動意義をより明確にするためには三月前期から第三帝国期におけるブルシェンシャフトの活動を知る必要がある。

3．シンポジウム：近代ドイツの社会的弱者に関する諸問題

平井　昌也／須摩　　肇／村上　嘉希／北川　　尚
司会　永井　達夫

1）平井　昌也「19世紀における社会的弱者としての作家たち」

経済的、政治的、社会的、それぞれの視点から、19世紀ドイツの作家たちを見ていくと、彼らの弱者としての姿が浮かび上がる。

この時代の作家の作品発表の主な舞台は文芸雑誌や新聞の文芸欄だった。これら定期刊行物が過当競争に陥ると、作家は安い原稿料と作品の大量生産を迫られ、苦しんでいた。19世紀はまた、文学と社会が密接に結びついた時代だった。革命思想を伝える役割を担った作家たちは、政治に接近したがゆえに、政府による出版弾圧を受けた。当初、作家は民衆の後押しを受けて活動を活発化していた。しかし、革命が終わると、政治作家たちは再び政府から迫害を受けた。また、彼らは民衆からも見放されて孤立し、社会的に抑圧された境遇に追い込まれてしまった。

2）須摩　　肇「社会的弱者としての同性愛者たち」

現在のドイツは同性愛に対して比較的寛容な国だが、それは今に至る

までの、権利獲得のための地道な運動があったからだ。

同性愛者を処罰する内容のプロイセン刑法143条は1851年に成立し、その後形を変えながら1994年まで続く。法律家ウルリヒスは最初に同法に異議を唱えた。彼をはじめとする19世紀後半の活動家たちによって同性愛者のアイデンティティーが作られる。20世紀になると大資本家クルップによるスキャンダルが発生する。同性愛を疑われた彼は自殺をする。ベルリンを拠点に活躍した性科学者ヒルシュフェルトの業績も瞠目に値する。ユダヤ人でもあった彼はナチスに追われ亡命を余儀なくされた。ナチスはユダヤ人だけでなく同性愛者をも弾圧の対象にした。

3）村上　嘉希「ナチス期のシンティ・ロマ」

1982年旧西ドイツ政府はナチスによるシンティ・ロマ（ジプシー）の大量虐殺を認めた。その犠牲者の数はヨーロッパ全体で50万人以上とされる。

ナチスの蛮行の根拠となったのは、より優れた子孫を残すことを目的とした人種優生学だった。シンティ・ロマはナチスによって存在価値のない劣等民族とみなされた。ナチスはマスメディアを利用し、シンティ・ロマに対する国家的な迫害を行った。例えばシンティであるプロボクサーのヨハン・トロルマンが、人種的な理由によりドイツ・ライトヘビー級チャンピオンのタイトルを剥奪され、収容所で殺害される悲劇もそのようななかで起こった。ナチス国家長官ヒムラーが公布したアウシュヴィッツ令によって、同収容所に送られたシンティ・ロマは２万３千人を超え、そのうち２万人あまりが殺害されたという。

4）北川　　尚「近代ドイツ精神医学とナチス」

ナチス支配下のヨーロッパでは、約20万人の障害者が計画的に「安楽死」させられ、そのなかには多くの精神障害者が含まれていた。本来なら彼らを守るべき精神科医たちも、直接的・間接的にこの殺戮に協力している。

啓蒙思想の洗礼を受けた18世紀末の精神医学者たちは、都会から離れ

た田園地帯に病院をつくり人道主義的な治療を行った。それが変わっていくのはドイツ精神医学が自然科学の影響を受ける19世紀中頃からである。グリージンガーなどの医師が精神病を脳の病気と規定し、病が進行すれば治療が不可能だとみなした。19世紀後半になると、さまざまな精神疾患が急増し、また精神医学界では遺伝法則に影響された説が支配的になる。モレルは外界からの人体への悪影響（変質）がやがて精神病になるとした。これらの説がナチスによる「断種」や「安楽死」措置へとつながっていった。

（司会進行／概要執筆責任、永井達夫）